

認知症 家族まるごと支援

ミーティングセンター 県内で拡大

認知症のために不安や疎外感を抱く当事者と、介護にストレスを感じている家族。時に衝突することもある両者を一体的に支援する「ミーティングセンター」という集まりが、県内で広がりつつある。他の家族との交流を通じ、家族関係を結び直す試みだ。あす21日は、認知症への理解を深める「認知症の日」。

ある日曜の朝。高知市保健福祉センター（同市塩田町）の栄養実習室に、にぎやかな笑い声が響く。「ミーティングセンター高知」の参加者約10人が、ギョーザ作りを楽しんでいた。

認知症当事者と家族、支援する専門職らが一緒にネギを刻み、あんを皮で包む。包丁を握る姿を家族が心配そうに見守る一方、当事者の女性は「息子が小さい頃は、よう作りよったねえ」と懐かしむ。最後は全員で出来上がったギョーザやチャーハンをほおばり、笑顔が広がった。

「できた」が自信に

ミーティングセンターは1992年にオランダで始まり、欧州各地に浸透。日本では国のモデル事業を経て2022年度に自治体の地域支援事業となった。

話し合い、交流 結び直す絆

に住む当事者の女性(67)は「車の運転を止められちゃうき、普段はテレビの番。ここではみんなとわいわい、あちこち行けて楽しい」と声を弾ませる。

運営メンバーの矢吹知之・県立大教授(54)は「自分で決めて、できた」経験を重ねることで、当事者の自己効力感が高まる」と解説する。

在宅生活延ばす

ミーティングには家族同士の「出会い」の意味もある。長い時間を共に過ごす家族は互いにイライラが募り、きつい言葉を浴びせるなどしやすい。矢吹教授は「ほかの家族の距離感や接し方を見ている

と、そうした家族関係が自然と変わる」と言う。

妻の介護を担う高知市の男性(65)は「会話が一方通行になりストレスを感じる時もある」と明かしつつ、「みんなが集まって遊びに行く気軽さがいい。同じ男性介護者同士で悩みや愚痴を言い合える。ここがなかったらどうなっていたんやろうと時々考えます」。

県内では「一高知」の始動後、新たに高知市と香美市の計4カ所にセンターができた。うち高知市の秦地域包括支援センターは25年4月にスタートし、5家族が参加している。

担当職員は「一緒に活動する中で家族に気付きが生まれている」と話す。ほかの家族が認知症の人に優しく接する姿を見て、「ああやって声をかけられたらいいけど」とつぶやいた参加者がいた。当事者が流しそうめん用の竹を割るのを見て、普段は見えにくくなっていた力を再認識した家族もいた。

矢吹教授によると、オランダではセンターの支援により、当事者が施設に入所せず在宅で過ごす期間が長くなり、社会保障費の削減につながっているという。矢吹教授は「本人支援、家族支援、本人と家族の一体支援と三つの役割を持ち、小さな自治体でも無理なくできる取り組み。県内各地に広がってほしい」と期待している。(石丸静香)